

「こんな世の中や、神さんも仏さんも頼りになんかならへん。このクルスかて、放つたろか思うたけど、きれいやさかい捨てられへんで、行李の中にならずと入れっぱなしで忘れてた」

さきはそう言つて、手の中のクルスに目を落としました。

「けどな、こないだから、あのジョアンさん見ててな。ああ、こないに一所懸命、神さんの話をしてはる人もいてるんやな思つて。天主教の人て、皆ええ人なんやないかと思えてきてな。そしたら、なんや、あの男も、うちを嫌いになつたんやのうて、戦に巻き込まれたか、死んでしもたんかなあ、て思えてな」

「ほんまなあ」

たえは、何と言つていいかわからず、ただ相づちをうつた。

「うちを迎えに来るんがジョアンさんやつたら、どないやつたんやろか。ちよつとはデウスさまを信じられたんやろか。今さら、そんなこと言うてもしよらむないなあ、ははっ」

さきは乾いた声で笑つた。その、さきの横顔を見つめていたたえは、手の中のクルスごとさきの手を握つて、言つた。

「おさきさん、あんた、まだ間に合うわ。ジョアンさんがおるうちに、その、入信の誓いいうんをたて

や。ほんで、ジョアンさんについて行き！」

「おたえさん？」

さきは驚いて、たえの顔を見つめた。たえは、自分でも驚くほど、強い声で言った。

「あんた、今までずーつとしんどい思いしとつたんやろ。ほんとは、神さんでも仏さんでもええさかい、すがりたかつたんやろ。そやさかい、そのクルス、放られんかつたんや。もうええわ、楽になり！」

「おたえさん、女将さん、けど」

「うちの宿のことは心配せんでええ。東次郎さまには、うちから言うたるさかい。あんた、楽になり！」
たえの心の中で、小さな火が燃えていた。その火種が何なのか、たえにははつきりとわからなかったが、それは今のこの世の中に対する怒り、弱い女ばかりが辛い目に遭うという「宿縁」に対する怒りのようなものかもしれない。

これで恋敵を追い払えるなどとは、たえは微塵も思っていないかった。ただ、人生に憂いたさきの心を救ってやりたかった。さきにも、そのたえの思いは通じていた。

「おたえさん……」

たえに手を握られて、さきはうつむき、静かに涙を流した。

「泣かんでもええ、泣かんでもええで」

昨日、さきぎにされたのとは逆に、たえはさきの肩をそつと撫でてやった。

「これは。あなたがクルスをお持ちでしたか！」

「円や」に帰ったたえとさきぎに、クルスを見せられたジョアンは驚いた。

「このような所で信徒に会えるとは、これもデウスの御意志でございましょうか」

さきぎのクルスを手に取り、ジョアンは片手で十字を切った。

「いや、うちはまだ信徒やのうて、入信の誓いもたててへんのですわ」

さきぎが、申しわけなさそうに言う。ジョアンはにこつと笑って、

「それならば、真実に決心がおありならば、パーデレ・カブラルにお願いして、洗礼を授けていただきましょう。一人でも信徒が増えることは、我ら皆の悦びでございいます」

ジョアンの言葉に、さきぎはほつと安心した笑顔を見せた。その横から、たえが言った。

「それでな、ジョアンさん。天主教のお寺、南蛮寺と言ったかいな、そんなところで、おさきさんを居らせてくれるところはないやろか」

「それは、さきぎさんがここを出るといふことです

か？」

ジョアンが聞くのへ、たえはうなずいて、

「尼さんになるいうたらええんかいの。さきさんがその、デウスさまにお仕えしながら、安らかに暮らせるようにしてあげたいんや」

ジョアンは納得した表情でうなずいて、

「我らはミゼルコルヂヤ、慈悲の組なる信徒の講を作り、弱き者、貧しき者の救済に務めております。その中には身寄りのない寡婦の暮らす家や、老人の家もあります。そこでは互いにみな助け合い、ただ養われるのみならず、己が誰かの役に立つことに悦びを見いだすのです。九州にも、堺にもこの講がございますので、どちらへでも行かれるとよいでしょう」

「ほんまな。おさきさん、よかったな」

たえは笑いかけたが、さきは

「けど、ここの旦那が」

と、不安な表情を隠さない。たえは、

「ちよつと待ってて、東次郎さまと話しよ。もう今、決めたらええさかい」

と、さつさと奥へ東次郎を呼びに行った。

たえとさきの話聞いた東次郎は、目を白黒させた。

「いや、そやけどおたえ、おさきを手放せて。これには金も使うとるし。客の評判もええのに、それに」
「それに何やの。お前さまが、離れとうないんと違
うの」

「いや、それは」

何やらいつもと違う、強い口調でたえに言われて、東次郎はもごもご言って黙り込んでしまう。

その時、ジョアンが言った。

「もし、おさきさんに対してあなたが買った代価が惜しいというのであれば、私どもがそれをお支払いいたします。それでいかがでございましょうか？」
「う、うむ、そんなら」

そうまで言われては、東次郎は返す言葉がない。不承不承ながら認めることになってしまった。ジョアンの方は、おそらくカブラルが怒るだろうが、その時は、これも貧民救済の一つであると説得しようと、内心で思っていた。

傍らで成り行きを見ていたさきは、東次郎が納得した様子に、ほっと安堵の表情を浮かべた。そして、たえに言った。

「そうや、おたえさんも、天主教の信心したらどないやろ」

「ええ、うちも？」

「えええ？」

東次郎の方が、たえよりもたまげたまげた声をあげた。たえは、晴れ晴れとした笑顔を見せるさきの顔を見た。静かに微笑んでいる、若いジョアンの顔を見た。うつすらと忘れかけている、生き別れた幼い子らの顔を思い出した。そして、ジョアンに見せられた聖母マリアと幼子イエスの絵が目には浮かんだ。

「あの、お優しいお方を拝んどつたら、うちも心安らかにおられるやろか」

「はい」

と、ジョアンは微笑んでうなずいた。

「サンタマルヤは、その慈悲深きお心により敬愛する者すべてをお救いくださいれます」

「そうか、ほんなら」

たえはしばし考え、それから顔を上げて、しっかりとした声で言った。

「決めたわ。うちも天主教を信心させてもらおうわ」

「ぬしは何を言いよんや。ほんまに天主教を信心するつもりか」

東次郎は、あきれて大声で言った。たえは

「そやかて、お前さまも聞いてたやろ。ジョアンさんはええお話ししてなさったわ。ほんまにうちは、すうつと気が晴れたんや」

「そりやぬしが、ジョアンさんの話を喜んで聞いたのはわかってるけどな」

東次郎は眉を寄せて、溜息をついた。

「けど」

と、たえは、ふと眉を曇らせた。

「けど、うちは、ここを離れて九州やら堺には行かれへんのやけど。それでもええのやろか。南蛮寺に入らんでもええやろか」

「それは気にかけてともかまいませんぬ。どこにいうと、デウスを乞い願うならば、その御心はあなたの内にあります」

ジョアンは静かに、けれど力強く言った。

「あなたが、ここから始めなさい。あなたが自身が救われるために、あなたが誰かを救いなさい。救われるのを待つアニメ（靈魂）は数限りなく在りまするゆえ」

「ジョアンさん」

いつしかたえは、胸の前で両手を組んでいた。

（以上5月16日放送分）